

望郷・雪都は初夏

金子 重男 (中51回)



昭和18年春、小石川・春日町に創立された全寮制の鉱業学院は、南方圏の鉱物資源開発に従事する技術者養成の専門学校である。中4

修了以上の学歴を有する25歳までの青少年が対象だった。国が公認、南方進出企業団が衣食住、学費一切を後援した。

定員50名。私は南寮、石廊下を隔ててミヤ（宮崎行蔵）は東寮だった。

4月15日が入学式で、3日後には茨城県・内原の満蒙開拓義勇軍訓練所の川田分所にいた。月末までの日程で「錬成」と称する開墾作業と団体行動が主体の毎日であった。

二人の東京見物は当てがはずれたが、この「錬成」を体験しないことには「海外渡航許可書」が取得できないという。広大な原野の彼方に折々、渡満間近な少年たちの姿が陽炎にゆらめいて見えた。

5名一班となり5月早々にはここを離れる。足尾銅山から常盤炭田、息つく間もなく秩父・長瀬の荒川沿岸の岩石、地層調査、陸地測量の実習に次ぐ実習、学院へ戻るのは6月上旬と予告されていた。

ミヤとは別班、別行動で1ヶ月近く会えないことになる。目まぐるしいが来春には渡航せねばならないのだ。彼の地の戦況もきびしいようで一抹の不安がある。

4月29日となった。天長節は「錬成」も休み。夕食後、学生全員が初めての茶話会となった。茅で囲った満蒙固有の包屋、土間に植え込まれた食卓には大きなジャガ芋が幾皿も湯気を上げている。調味の塩が乾いてキラキラ光っていた。その中央に副学院長で尊称は「おじいちゃん」の大沢舎監がチマチマと固まっていた。退役陸軍大佐という。こんな間近で接したのは今日が初めて、一瞬、あまりにもある人物に似ていたのでおどろいた。

神社近く掘端を軍馬で58連隊へ向かう山崎保代部隊長の姿に重なったのだ。

軍馬が遅しすぎたのか、部隊長が小柄に見えて、答礼する様子が全く勇ましくなかった。上級生が「若いとき高中の軍事教官をなさったことがある。それで格別に生徒は立止まって拳手の礼を執るのだ」といった。

前年秋、私ら中4は3泊4日の営内宿泊で「高中の諸子に本日は最大の馳走をする」と営庭で部隊長が挨拶なさった。ジャガ芋の天ぷらであった。両大佐の和顔、温容、それにジャガ芋までが、そっくり想念に重なってくるのだ。

舎監が「さて、各地での実習がはじまる。ここで今夕は相互の自己紹介、出身地の説明などをし合おうではないか」と見渡された。

私らはひるんだ。ところがサッと名乗りをあげたのが佐渡中出身の二人だった。「相川音頭」を丸っこい方が颯々と歌い、色白な美少年風が被った手拭いのへりをくわえて踊った。節目節目にスイッと手首が動き、

手刀に思えた。学生一同は固唾をのんだ。舎監は、感動のあまり声が高ぶられた。

「相川音頭には武芸が織り込まれていると聞いていたが、よく分かった」

そして「同じ越後の後続は居らんか」とうながされる。思い切って怯懦を拂った。

「ミヤ、どうすん。天下の高中だど」

「お。佐渡のしょ（衆）に負けらんねこつてや」

「だら、ホッコ（狂気）おこすど。謙信公音頭だ」

歌は私、彼は浜っ子ふうの豪快な踊りっぷりだった。

戦するなら 謙信公のような アリヤ
謙信公のような 敵も情に哭くような
ア、 そうだ そだ そだ その意気だ
その心意気

舎監も学生も一緒になって手拍子を打ってくれた。母校での日、校庭北隅のシロツメ草を踏んで踊ったことが脳裏を過った。妙高連峰は残雪のころだ。折笠、野口、丸山、川瀬らは「予科練」へ向かったが。

その彼らが頬をバラのように紅潮させて、悠久の大義に生きるのだと言っていた。澄み切った瞳だった。切くないのか。

私らも来春は南方の天地、「悠久の大義」とは、何と空しいことか。女々しく鼻腔がツーンとなって、2番・3番が哀調をおびた。

あれから、予定どおり6月初旬、ミヤより一足先に東京へ戻った。その日、水道橋駅西口付近にある学院指定の銭湯へ行った。

帰りに夕食までは時間があつたので九段近くまで歩いてみた。生け垣の屋敷が多く、かなり高台にきていた。田舎者はここら限度と引き返そうとしたとき、不意に忍びやかな芳香に包まれた。薄暮のなかで辺りを見回した。薄紫色の桐の花房が生け垣から身をのり出していたのだ。

桐なら珍しくはなかった。母校の野球ネット裏に一本あつた。夏場のスキー部は慣例の金谷山頂往復マラソンで明け暮れ、4年間はこのベンチで汗を拭ったが、この素朴な木の葉翳から花房が覗き薫っていたとは。全く感知せぬまま高田を去つたのだ。もはやその時に戻るすべはない。

翌々日、ミヤが重大なニュースをもって実習から戻ってきた。アリューシャン列島最西端のアッツ島で、5月末日に山崎部隊長以下2500有余の守備隊員が全員玉砕したというのだ。

「ギョクサイって、玉と砕ける、あれ？」

「全滅さ。軍が玉砕ということばに改め報道したと、巷の噂だったわ」

二人が舎監室をのぞくと、さすが退役の大佐、「そう『部隊長以下全員、突撃敢行す』この最後連絡を受けるや参謀総長と陸軍大臣は涙を流して合掌したそうな」

舎監も小さな目を固くつむった。

「二人の郷土部隊、高田58は日本最強の雪国男子よ。雪が鍛えたんだな、きっと」

舎監が陸軍大佐の現役に見えた。この2月25日、山崎部隊が高田を発つたのは知っていたが、孤立無援のアッツ島へ向かったとは。

「ミヤ。入浴後に九段へ行ってみるか」

英魂は郷里の高田、九段には断じて居ないが、彼と共に桐の花房の芳香にひたりたかったのだ。私らの未来にこんなひとときは二度と訪れないだろうことも、強く思っ
て言った。
「あの営内宿泊訓練で、毎晩、講談を語っ

てくれた伍長殿も散華したんだろうな」
名調子を彼はなつかしんだ。

牡丹雪の雪都は今、桐の花香る初夏。い
ざ、かえりなむ、英魂。

万感と望郷で、二人は石廊下でポロポロ
涙をこぼしてしまった。

